

知覚経験の選言説と共通要素説の争点はどこにあるのか

新川拓哉

概要

本稿の目的は、知覚経験の選言説¹と共通要素説の論争を整理し、本質的な争点を洗い出すことである。本稿は次の三つの節から構成される。第一節では、知覚経験の選言説を包括的に概観する。第二節では、選言説と共通要素説の論争は実質的でないと主張する Bence Nanay の議論を紹介する。第三節では、Nanay の議論に対して、選言説と共通要素説の間には実質的な対立があると論じる。

1. 選言説

1.1 選言説についての基本的理解

近年の知覚の哲学においては、知覚経験²の本性を捉える理論枠組みとして「選言説(disjunctivism)」という立場が注目されている。選言説の嚆矢は J. M. Hinton (1967, 1973) である³。Hinton によれば、選言説とは経験報告言明の分析について「共通要素説(common factor theory)」と対立する立場として定式化される。共通要素説によると、「私は赤いリンゴの経験をもっている」という言明⁴は、赤いリンゴについての真正な知覚とそこから主観的に区別不可能⁵な赤いリンゴの幻覚に共通する心的状態／出来事 M についての(about)ものだとされる。他方で、選言説によると、その言明は赤いリンゴの真正な知覚に特徴的な心的状

¹ ただし、知覚経験に関する選言説の他に、行為論の文脈においても選言説というラベルが用いられることがある(Dancy 2008)。本稿では、知覚経験の選言説に限定して議論を進める。

² この論文では、「知覚経験」は事物が正しく知覚されているときの経験（真正な知覚経験）、錯覚経験、幻覚経験を含むものとする。

³ 選言説の基本的なアイデアを Hinton 以外の哲学者に見て取る論者もいる。たとえば、Travis は Gottlob Frege に選言説的なアイデアが含まれていると主張し、Thau は J. L. Austin に選言説的な着想が見て取れると論じる(Thau 2004; C. Travis 2005)。とはいえ、選言説をはじめて明示的に定式化したのが Hinton だというのは共通了解といってよいだろう。

⁴ 経験報告言明は、「赤いリンゴの経験をもっている」という表現のかわりに「赤いリンゴがあるようにみえる(appear, look)」など、「ようにみえる」というオペレーターを用いても構成できる。

⁵ ここでの「主観的な区別不可能性」の意味についてももう少し述べておこう。幻覚経験が真正な知覚経験から主観的に区別不可能だと言われるときには、次のことが意味されている。すなわち、ある主体がある幻覚経験をもっているとき、その主体は内観のみによってその経験が真正な知覚経験ではないと知ることができない、ということである(Soteriou 2016, 220)。この意味での主観的な区別不可能性にはある重要な特徴がある。すなわち、ある幻覚経験がある真正な知覚経験から主観的に区別不可能だということが、その真正な知覚経験がその幻覚経験から主観的に区別不可能だということを含意しないという点である。つまり、ここでの主観的な区別不可能性は対称的ではない。幻覚経験の主体が内観のみによってその経験が真正な知覚経験ではないと知ることができないとしても、真正な知覚経験の主体が内観のみによってその経験が幻覚経験ではないと知ることができないとは限らない。なぜなら、幻覚に陥っているときと正しく知覚しているときで、その主体の置かれている認識論的立場が異なっているかもしれないからである。関連する議論については、Martin (2006)、Logue (2012a)そして Dorsch(2016)を参照せよ。

態／出来事 M_1 か、あるいは、それから主観的に区別不可能な赤いリンゴの幻覚に特徴的な心的状態／出来事 M_2 の、どちらかについてのものだとされる ($M_1 \neq M_2$)。すなわち選言説は、赤いリンゴについての経験報告言明の志向的対象を、 M ではなく M_1 か M_2 のどちらかだと考える立場である⁶。

選言説を採用する基本的な利点は、「私は赤いリンゴの経験をもっている」という言明が真だと認めても、真正な知覚と幻覚のあいだの心的な共通項にコミットせずにはすむというところにある⁷。この種の心的な共通項はいわば「知覚のヴェール」として私たちの外的世界への認知的アクセスを妨げるものとみなされることがある⁸。この考えからすると、この種の心的な共通項を認めることは懐疑論的問題を生むとされる。

真正な知覚と幻覚の共通項とされる心的状態／出来事 M を特徴づけるやり方は複数ある。たとえば、 M を現象学的観点（どういう現象的性格をもっているか）から特徴づけることもできるし、認識論的観点（どういう認識論的性質をもっているか）や意味論的観点（どういう内容をもっているか）から特徴づけることもできる。したがって、 M を特徴づける方法に応じて別種の選言説が導かれることになる⁹。それぞれの選言説を具体的に紹介していくまえに、それら全てに適用可能な理論図式を提示しておきたい。まずは共通要素説の図式を提示し、その後に対応する選言説の図式を示す。

共通要素説：真正な知覚経験(VE)とそこから主観的に区別不可能な幻覚経験(HE)について、それらの経験のある側面 A は、VE と HE に共有される特性 X によって説明される。

選言説：VE と HE がもつある側面 A は、VE の特有の性質 Y によって説明されるか、 Y とは別の HE がもつ特性 Z ($Z \neq Y$) によって説明されるかのどちらかである。

⁶ この選言説の枠組みにどう錯覚を位置づけるかも重要な課題である。一般的には、真正な知覚の場合を「良い場合(good case)」と、幻覚の場合を「悪い場合(bad case)」としたうえで、錯覚をどちらに位置づけるべきかが検討される(Byrne and Logue 2008; Sturgeon 2008)。つまり、「ある主体が経験 E をもっている」という言明が、真正な知覚や錯覚に特徴的な M_1 か幻覚に特徴的な M_2 のどちらかについてのものだと考えるべきなのか、真正な知覚に特徴的な M_1 か錯覚と幻覚に特徴的な M_2 のどちらかについてのものだと考えるべきなのか問題となる。また、たとえば Fish のように、錯覚には多くの種類があり、それらは真正な知覚と幻覚のあいだに連続的な仕方で分布するようなものだと考えることも可能である(Fish 2009, 145–81)。この場合には、「ある主体が経験 E をもっている」という言明は、真正な知覚に特徴的な M_1 か、それぞれの種類の錯覚に特徴的な $M_2 \dots M_n$ か、幻覚に特徴的な M_{n+1} のどれかについてのものだと考えることになる。本稿では、真正な知覚と幻覚に焦点を絞り、錯覚の位置づけはオープンなままにしておく。

⁷ 選言説を採用する利点とみなされているものは他にもある。Hinton(1980)やMartin(2004)は、選言説のほうが共通要素説よりも理論的な負荷が小さく、それゆえ標準的な立場として採用されるべきだと主張する。この議論に対する批判については、Byrne and Logue (2008, sec. 6)を参照せよ。

⁸ ただし、Snowdon(2008, sec. 3)が指摘するように、Hinton 自身はそうした心的な共通項を認めるべきではない積極的な理由を明示的に述べていないようにみえる。

⁹ 「選言説とは結局どういう立場なのか」についての論争もあったが、現在ではさまざまな種類の選言説があるというのが標準的な見解となっている。この論争については Fish (2005)と Snowdon(2005)を参照せよ。

この「側面 A」は当の心的状態／出来事の特徴づけ方に対応する。つまり、そこに何を当てはめるかによって、選言説（と共通要素説）のタイプが定まる。そして、X、Y、Z に何を当てはめるかによって、そのタイプの選言説（と共通要素説）の内実が定まることになる。

A が何であるかを問わず、選言説の支持者は Y を「知覚経験をもつ主体と環境内に実在する事物とのあいだに成立している知覚関係（以下、単に「知覚関係」と呼ぶ）」だと考える^{10,11}。VEのある側面を説明するために知覚関係に訴えなければならないという考えは、選言説を採る動機となる。というのも、HE においては知覚関係が成立していないため、もし共通要素説を採用するのであれば、VE においても知覚関係に訴える説明が使用できなくなるからである。したがって、選言説をめぐる争点の一つは、真正な知覚経験のある側面 A が知覚関係に訴えて説明されなくてはならないかどうかである。

次節では、それぞれの種類の選言説について紹介していく。現在では、大きく分けて四つの種類の選言説があると考えられている。それらの選言説の違いは経験のどの側面が扱われているかに存する。その四つの側面とは、「認識論的役割」、「内容」、「現象的性格」、「基礎的な種類」である。以下では、前節で提示した図式に合わせてそれぞれの選言説を定式化する。また、なぜそれらの側面が知覚関係に訴えて説明されねばならないと考えられているかについても合わせて紹介する。

1.2 認識論的選言説

真正な知覚のケースであれ幻覚のケースであれ、赤いリンゴの知覚経験をもつことは「ここに赤いリンゴがある」と判断する理由(reason)あるいは根拠(ground)を与える。知覚経験はその主体が反省（内観）を通じてアクセス可能なものなので、そこで与えられる知覚的判断に対する理由（根拠）も反省的にアクセス可能なものだと考えられる。知覚的判断に対して反省的にアクセス可能な理由（根拠）を与えるという知覚経験の認識論的役割に関する一つの立場が「認識論的選言説(Epistemological Disjunctivism)」である¹²。

認識論的選言説： 真正な知覚経験とそこから主観的に区別不可能な幻覚経験について、それらによって与えられる反省的にアクセス可能な理由（根拠）は、知覚関係¹³によつ

¹⁰ 主体と事物のあいだに知覚関係が成立することは、その事物が存在するという含意を含む。この意味で、知覚関係は存在含意的である。なお、知覚関係が成立する条件についての標準的な分析は因果概念を用いて行なわれる(Grice 1961; 前田 2002, Fish 2010, chap. 7)。本稿の議論は知覚関係をどう分析するかには依存しない。

¹¹ 選言説のミニマルな主張は「知覚経験のある側面について、真正な知覚のケースにその側面を説明する Y と、幻覚のケースにおいてその側面を説明する Z が異なっている」というものである。そして、Y と Z をどう特徴づけるかは「選言説」というラベルの適切性には影響しない。ただし実際には、Y を知覚関係以外のもの置き換える選言説論者はいない。そのため本稿では、Y を知覚関係で固定する。

¹² 認識論的選言説については、Prichard (2012)の他にも、小暮(2009, Section 2-2)、Soteriou (2016, Chapter 5)などが参考になる。

¹³ 知覚関係はその関係項となるもののカテゴリーに応じて複数の種類があるかもしれない。たとえば、日常的個物と事実のどちらを関係項にとるかによって、知覚関係の種類は異なるかもしれない。つまり、あ

て説明される（真正な知覚の場合）か、他の何かによって説明される（幻覚の場合）かのどちらかである。

認識論的選言説の擁護者である Pritchard (2012)によると、真正な知覚経験によって与えられる反省的にアクセス可能な理由は、知覚関係に訴えて説明されるべきである。というのも、知覚関係に訴えることなしには、真正な知覚経験によって与えられる反省的にアクセス可能な理由が事實的(factive)だという点を認められないからである。なお、ある信念を支持する理由が事實的であるとは、その理由の所有がその信念の真理を含意するということである。

なぜ共通要素説では真正な知覚経験によって反省的にアクセス可能な事實的な理由が与えられるということを認められないのか。周囲に実際にリンゴがなくとも、リンゴについての幻覚経験をもつことは可能だと考えられる。その幻覚経験をもつことにより「ここにリンゴがある」という信念を支持する反省的にアクセス可能な理由—これは「ここにリンゴがあるようにみえる」と述べることにより言及されうる—が与えられるというのはもつともである。だが、この場合には「ここにリンゴがある」という信念は偽であるので、その理由は事實的ではありえない。したがって、その幻覚経験は反省的にアクセス可能な事實的な理由を与えるという役割を担えない。そのため、反省的にアクセス可能な理由を与えるという認識論的役割について共通要素説を採用すると、真正な知覚経験によって与えられる反省的にアクセス可能な理由が事實的であるということも認められなくなってしまう。他方で、主体とリンゴの間に知覚関係が成立することは、そのリンゴの存在を含意する。したがって、真正な知覚経験をもつことによって与えられる反省的にアクセス可能な理由が、その経験主体とリンゴとの間に成立している知覚関係によって説明されるなら、その理由—これは「ここにリンゴがあるのを見ている」と述べることにより言及されうる—を事實的だと考えることができる。

では、真正な知覚経験によって反省的にアクセス可能な事實的な理由が与えられるということ認めべきなのはなぜだろうか。Pritchard は二つの理由を挙げる(2011, 438-439)。一つは、反省的にアクセス可能な理由が事實的であることを許容する立場は、内在主義的な知識の理論と外在主義的な知識の理論のいいとこ取りができるからである(Pritchard 2012, 1-3)。彼によると、内在主義の利点は、ある命題 P を信じる理由を述べられない限りは、その主体が P という知覚的知識をもっているとは言えないという直観を反映しているところにある。他方で、外在主義の利点は、「知識が成立するためには、信念への認識論的サポートと[外界で成立している]関連する諸事実とのあいだの客観的な結びつきがなければならない」(Pritchard 2012, 3)という直観を掬い取れるところにある。認識論的選言説は、真正な知覚経験によって与えられる反省的にアクセス可能な証拠が事實的である—つまり、外界

る対象を見ること(seeing an object)とある事実を見て取ること(seeing that P)は別の種類の知覚関係かもしれない。認識論的選言説は主に後者のタイプの知覚関係に訴える。

で関連する事実が成立していることを含意する—ことを認めることで、内在主義と外在主義の利点をどちらも確保できるのである。

第二の理由は、それを採用することによって環境内の事物についての知識への懐疑論がうまく解消できるという点にある(Pritchard 2012, 4)。Pritchardによれば、その種の懐疑論は、反省的にアクセス可能な証拠が事実的ではないと考えるところから生じているという。もしこれが正しければ、認識論的選言説はそうした懐疑論を根元から断つことができる¹⁴。

1.3 内容の選言説

知覚経験が表象的だというのは現代の知覚の哲学における標準的見解である¹⁵。知覚経験が表象的であるとは、知覚経験が信念や判断と同様に世界のあり方を表象する内容をもつということである。これはすなわち、ある知覚経験の内容が正しいのは世界がどういうあり方をしているときなのかと問える、つまり、その内容の正しさ条件(accuracy condition)を問えるということである。

知覚経験の内容をめぐる一つの問いは、真正な知覚とそれから主観的に区別不可能な幻覚は同種の表象内容をもつのかというものだ。経験内容の選言説は、それらが別種の表象内容をもつと主張する。

経験内容の選言説¹⁶: 真正な知覚経験とそれから主観的に区別不可能な幻覚経験について、それらの経験がもつ内容は、知覚関係によって説明される（真正な知覚の場合）か、他の何かによって説明される（幻覚の場合）かのどちらかである。

では、知覚関係に訴えて説明するべきだとされている内容—真正な知覚経験がもっており幻覚経験がもたない内容—とはどのようなものか。それは、「単称的(singular)」、「対象依存的(object-dependent)」あるいは「対象包含的(object-involving)」と呼ばれる内容である（ここでは「単称的内容」を使う）。ある経験がある対象 O_1 について「赤い O_1 がそこにある」という単称的内容をもつとしよう。その場合、その内容が正しいのは、実際にそこにあるのが O_1 であるときのみである。たとえ O_1 と質的にまったく同一の対象がそこにあつたとしても、その内容は正しくならない。

真正な知覚経験が単称的内容をもつべきだと考える理由は二つある。一つは、思考や判断などの高次認知活動に対する内容付与的な役割に関するものであり、もう一つは経験の正しさ条件に関するものである。

¹⁴ 認識論的選言説に対する批判については、Logue(2011)、Smithies (2013)そして Wright(2008)を参照せよ。認識論的選言説を擁護する議論としては、Pritchard(2012)の他に、McDowell(2008)や新川(2012)などがある。

¹⁵ たとえば、Chalmers (2006)、Dretske (1995, 2003)、Tye (1995, 2009a)、Pautz (2010)、Siegel (2010)などを挙げることができる。他方で、経験が表象的だということを認めない論者には、Travis (2004)や Campbell (2002)がいる。

¹⁶ 内容の選言説の擁護者には、Soteriou (2000)、Tye (2009b)、Schellenberg(2010)などがある。

まず、第一の理由について述べよう。私たちが単称的思考をもつことができるというのは確かである。というのも、私たちは思考において質的にまったく同一であるが数的に異なった対象を区別できるからである。また、「ある具体的対象の知覚経験をもつことによってその対象について単称的に考えることが可能になる」という主張は直観的にもっともらしいし、「そのためには、その経験の内容にその対象が含まれていなければならない」という主張も理にかなっている。これら二つの主張から、真正な知覚経験は単称的内容をもちうるものでなければならないという主張が引き出される。

次に、第二の理由について述べていく。マナとカナという質的に同一の姉妹がいて、まったく同じ背景のもとで並んで立っていると想像しよう。さらに、私がマナを特殊なグラスを通じて見ており、その結果として実際にはカナのいるところにマナがいるように見えているとしよう（カナは実際には視界から外れているとする）。このとき、私がおの特殊なグラスを通じてマナを見ることによって生じた経験 E_1 は、たまたまそこに（マナと質的に同一のあり方をした）カナがいるということによって正しくなると言えるだろうか。直観的には、 E_1 は正しくならないと考えられる。マナを見ることによって生じた E_1 は、マナが見えているとおりのあり方をしていることによって正しくなるのであり、それがカナのあり方によって正しくなるというのは奇妙だと思われるのである。知覚経験がこうした正しさ条件をもつということは、 E_1 が単称的内容をもつと考えればうまく説明できる¹⁷。真正な知覚経験の正しさ条件についての考察から、真正な知覚経験は単称的内容をもつという考えが動機づけられるのである。

1.4 現象的性格の選言説

現象的性格の選言説¹⁸： 真正な知覚経験とそこから主観的に区別不可能な幻覚経験について、それらの経験の現象的性格は、知覚関係によって説明される（真正な知覚の場合）か、それ以外の何かによって説明される（幻覚の場合）かのどちらかである¹⁹。

¹⁷ ただし、これが唯一可能な説明というわけではない。たとえば、Searle (1983)によれば、知覚内容は「この経験を引き起こしたもの」といった自己言及的な因果的要素を含む。Searleにしたがうと、 E_1 は「 F_1 - F_n という特徴群をもつ人が目の前にいて、その人がこの経験 (E_1) を引き起こしている」といった正しさ条件をもつことになる。上記のケースでは、目の前にいて F_1 - F_n を実際にもっているカナは E_1 を引き起こした人ではないので（実際に E_1 を引き起こしたのはマナである）、 E_1 は正しくないことになる。

¹⁸ このタイプの選言説を採用する論者としては、Brewer (2011)、Fish (2009)、Kennedy (2013)、Martin (2004)、Soteriou(2013)などがある。

¹⁹ 幻覚経験の真正な知覚経験からの主観的な区別不可能性は、「幻覚主体が内観のみによってその経験が真正な知覚経験ではないと知ることができない」ということとして分析される。この意味である幻覚経験がある真正な知覚経験から主観的に区別不可能だとしても、その幻覚経験がその真正な知覚経験と同じ現象的性格をもっているということは帰結しない。確かに、この主観的な区別不可能性は、それらの経験が同じ現象的性格をもつことによって説明される。だが、他の説明が不可能だというわけではない。現象的性格ではなく表象内容の同一性に訴える別の説明もありうるし(Logue 2012a)、そもそも問題となる主観的な区別不可能性はそれ以上の説明を与えられるものではないと考える論者もいる(Martin 2006)。

心的状態の現象的性格とは、「ある心的状態にあることがそのようなことであるような何か(what it is like to be in a mental state)」のことである。また、知覚経験の現象的性格は「現前 (presentation)」によって特徴づけられる。すなわち、知覚経験の現象的性格は、「知覚経験をもつときには、具体的な対象のようにみえる何かが現前している」と述べることで特徴づけられる。一般的には、知覚経験以外の心的状態／活動の現象的性格は現前性をもたないとされる。たとえば、ある対象についての情動や思考も現象的性格をもつと思われるが、それらをもつときにその対象のようにみえる何かが立ち現れるということはない²⁰。

現象的性格の共通要素説では、真正な知覚と幻覚において同種のものが現前するということになる。したがって、幻覚経験をもつときに現前するのは実在する日常的対象ではありえないので、真正な知覚経験をもつときにも実在する日常的対象が現前しているわけではないと結論づけることになる。他方で、現象的性格の選言説は、真正な知覚経験をもつときには実在する日常的対象が現前しているということを認めることができる。

この「真正な知覚経験をもつときには実在する日常的対象が現前している」という考えはしばしば素朴実在論と呼ばれる²¹。素朴実在論は主に以下の三つの議論によって動機付けられる。すなわち、「素朴な直観からの議論」、「存在論的儉約性からの議論」そして「直示的指示の可能性からの議論」である。

素朴な直観からの議論は以下である。私たちが自身の典型的な知覚経験を反省すると、直観的には、実在する日常的対象が現前しているように感じられる。素朴実在論はこの直観をもつともよく掬い取ることができる(Fish 2009, chap. 1; Kennedy 2009)。存在論的儉約性からの議論は以下である。新川(2014)によれば、素朴実在論は真正な知覚経験の現象的性格を説明するものとして具体的事物とそれが例化する性質以外の特殊な存在者を必要としない。したがって素朴実在論は、センスデータやクオリアのような特殊な心的対象や心的性質を措定して知覚経験の現象的性格を説明する立場や、特殊なタイプの表象内容に訴えてそれを説明する立場と比べて、存在論的に儉約的である²²。直示的指示の可能性からの議論は以下である。Campbell(2002, chap. 6)や Raleigh(2011)が論じるように、日常的対象を「あれ」といった直示語をもちいて指示したり、そうした対象についての直示的思考をもったりするためには、その直示語／直示的要素によって指示される対象が知覚経験において現前していなければならないと考えられる。そして、素朴実在論だけが日常的対象が知覚経験において現前することを認められるので、素朴実在論だけが日常的対象についての直示的指示や直示的思考の可能性を確保できる。

なお、もし知覚経験が対象 O についての単称的内容をもつために、O がその経験において現前している必要があると考えるならば、経験の内容の選言説は現象的性格の選言説を含意することになる。また、O についての信念を支持するような反省的にアクセス可能な

²⁰ Kriegel(2015)は、知覚経験以外の心的状態／出来事の現象的性格の特徴について詳しく論じている。

²¹ 素朴実在論については、Fish (2009)、Niikawa (2016)、Genone (2016)、Beck(2018)らを参照せよ。

²² Fish(2008, 2009, sec. 3.6)も関連した議論を行っている。

事実的理由をもつために、Oが知覚経験において現前している必要があると考えるならば、認識論的選言説は現象的性格の選言説を含意することになる。

1.5 基礎的な種類の選言説

基礎的な種類の選言説：真正な知覚経験とそこから主観的に区別不可能な幻覚経験について、それらの経験の基礎的な種類(fundamental kind)は、知覚的關係に訴えることによって説明される（真正な知覚の場合）か、他の何かによって説明される（幻覚の場合）かのどちらかである。

Martinによると、「ある出来事やエピソードが本質的に何であるか」(2006, 361)を特徴づけるのがその出来事やエピソードが属する「基礎的な種類」だとされる。では、知覚経験の本質をどのようにして解明すればよいのだろうか。たとえば、塩酸や水などの物質の本質は、化学的分析によって明らかにされると考えられており、そうした分析の手続きはすでに確立されている。知覚経験のような心的状態／出来事の本質を解明するためには、どのような分析が為されるべきなのだろうか。

ここでは、二つの異なる分析が可能である。一つは、哲学的な説明的役割に依拠した分析であり、もう一つは、心理学的な説明的役割に依拠した分析である。まず、哲学的な説明的役割に定位する分析について述べていこう。Logueによれば、Xが経験Eの基礎的な種類を特徴づけるのは、XがEの認識論的役割、表象内容、現象的性格を説明するときである(Logue 2012a, 2012b)。このように解釈された基礎的な種類の選言説を動機づけるのは、真正な知覚経験の諸側面は知覚關係に訴えて説明されるべきだという考えである。このタイプの基礎的な種類の選言説は、実質的には認識論的選言説、経験内容の選言説、現象的性格の選言説（と他のありうるタイプの選言説）の連言として、あるいは「それらの選言説は真である」というメタ的な立場として分析できるかもしれない。

他方で、心理学的な説明的役割に定位した分析は次のようなものである。知覚経験の基礎的な種類は、認知心理学における知覚経験の扱われ方によって決定される。つまり、知覚経験の心理学的理論に真正な知覚と幻覚の区別が反映されていなければ共通要素説が支持され、その区別が反映されていれば選言説が支持されることとなる。Burge (2005)によれば、認知心理学は近接性原理(Proximity Principle)を前提している。近接性原理とは、「知覚者の先行する心理学的状態が同じなら、あるタイプの（身体に対する）近接的刺激は、知覚システムへの内的な求心的・遠心的インプットと共に、（システムに誤作動や介入がないことを仮定して）ある特定のタイプの知覚状態を生み出す」(Burge 2005, 22)というものである。網膜への直接的な刺激によってある種の真正な知覚と主観的に区別不可能な幻覚を生じさせることができるとすれば、そうした幻覚経験とその知覚経験は近接性原理によって同じ種類の知覚状態だということになり、認知心理学理論のうちで同等に扱われる

べきだということになる²³。他方で、近年では、環境内の事物との直接的でダイナミックなインタラクションを組み込むような認知心理学の理論が発展しつつある(Orlandi 2013; Kirchhoff 2017)。こうしたアプローチでは、環境内の事物との直接的なインタラクションを含むような真正な知覚経験とそうしたインタラクションを含まないような幻覚経験は別種のものともみなされるかもしれない。

2. 選言説と共通要素説の論争の実質性に対する Nanay の反論

Nanay(2014)は、関係説と表象説のあいだに実質的な対立はないと論じる。Nanayによれば、関係説は「[真正な]知覚とは知覚された対象と知覚者との関係である」(321)と考える立場であり、他方で表象説は「知覚は対象がしかじかの性質をもつものとして表象する」(322)と考える立場だとされる。関係説は選言説を含意し、(Nanay がここで念頭においている)表象説は真正な知覚と幻覚がどちらも表象的だと考えるものなので共通要素説の一種だと考えられる。したがって、ここでの Nanay の議論は選言説と共通要素説との論争に適用できる²⁴。

Nanayによれば、知覚経験という種は「心臓」や「羽」などの生物学的種に似ており、「心臓」や「羽」が説明プロジェクトとは独立の本質をもたないのと同様に、知覚経験も本質をもたない(Nanay 2014, sec. 5)。「心臓や羽とは何であるか」という問いに対する答えが機能的観点、形態学的観点、進化論的観点のどれを採用するかによって変わりうるのと同様に、「知覚経験とは何であるか」の答えもどのような観点を採用するかで変わるのである。

Nanay は、この議論を踏まえて、関係説と表象説は知覚経験の本質—つまり知覚経験の基礎的な種類—ではなく個別化にかかわるものとして解釈されるべきだと論じる。

知覚の関係説と表象説の間の違いは、ふつう、知覚の本性についての論争だと考えられている。つまり、「知覚は本質的に表象なのか関係なのだろうか」という問いにおける論争だと考えられている。私は、知覚の関係説と表象説の間の違いを、知覚の本性にかかわるものではなく、知覚状態の個別化にかかわるものとして組み立てると論じる。(Nanay 2014, 325)

そして Nanay は、「知覚状態の個別化は説明プロジェクトに相対的である」(2014, 328)と主張する。つまり、「ある説明プロジェクトでは関係説を使うべきであり、別の説明プロジェクトでは表象説を使うべき」(2014, 328)だというのが。Nanayによると、関係説と表

²³ これに対して Campbell (2010)は、そうした近接性原理が成立するのは脳内の情報状態であり、意識的な知覚経験について近接性原理が成り立つというコンセンサスは認知心理学のうちにもないと論じる。

²⁴ ただし、Nanayは議論の範囲を知覚経験に制限せず、非意識的なものも含む知覚状態(perceptual states)について論じている。だがこの論点は、本稿での議論には影響しない。

象説を知覚経験の個別化についての立場だとみなすなら、説明プロジェクトに応じてそれらのうち適切なほうを採用すればいいだけなので、それらの間に実質的な対立があると考えする必要がなくなる。選言説と共通要素説のあいだの論争は、知覚経験には本質がある—したがってそれが属する基礎的な種類がある—と誤って考えることから生じた見せかけのものにすぎないことになる。

経験の基礎的な種類が哲学的な説明的役割によって特徴づけられると仮定すると、知覚経験の基礎的な種類がないとすれば、経験の認識論的役割、表象内容、現象的性格がなんらかの単一のものによって一元的に説明される必要はない。さらに、経験の認識論的役割、表象内容、現象的性格のそれぞれにかかわる個々の説明課題も、必要に応じて、選言説と共通要素説の枠組みを使いわけながら説明すればよいということになるだろう。また、経験の基礎的な種類が心理学的な説明的役割によって特徴づけられると仮定すると、知覚経験の基礎的な種類がないならば、心理学的な説明プロジェクトのタイプに応じて選言説と共通要素説の枠組みを使いわければよいということになる。たとえば、環境内の事物とのダイナミックなインタラクションの有無が問題になる場合には選言説的な枠組みを用いればよいし、脳内での情報表現のみが問題になる場合には共通要素説的な枠組みを用いればよい。Nanayによれば、説明プログラムに応じて選言説と共通要素説のうち適切なほうを採用するという仕方、「知覚について一見すると対立するようにみえる二つの考え方を調停する」(321)ことができるのである。

しかし、選言説と共通要素説のあいだに実質的な係争点はまったくないのだろうか。次節では、選言説と共通要素説のうちどちらを採用すべきかが明らかでない哲学的な説明プロジェクトがあると論じる。その議論が正しければ、知覚経験には基礎的な種類はないというNanayの主張を認めても、選言説と共通要素説の間に実質的な係争点が残ることになり、それらは完全に調停されるわけではないと言えることになる。

3. 選言説と共通要素説の実質的係争点

本節では、たとえNanayにしたがって知覚経験には本質—したがって、基礎的な種類—がないということを認めても、選言説と共通要素説のどちらを採るべきかが明らかでないような説明プロジェクトがあると論じる。言い換えると、知覚経験には選言説と共通要素説のどちらの枠組みを適用すべきかが争点となるような側面があると論じる。そのため、以下では次の作業を行う。まず、(1) 反省的にアクセス可能な理由、(2) 表象内容、(3) 現象的性格のそれぞれについて、ある単一の知覚経験がそれを二種類（以上）もちうるかを検討する。もし知覚経験がそれらを二種類（以上）もちうるならば、片方が選言説的にもう片方が共通要素説的に説明されることに問題はないので、実質的な係争点はないことになる。他方で、もし二種類（以上）もちえないようなものがあるならば、そこに共通要素説と選言説の実質的な係争点がありうることになる。結論を先取りして述べておくと、知

覚経験は二種類(以上)の反省的にアクセス可能な理由と表象内容をもちうるのに対して、二種類(以上)の現象的性格をもつというのはもっともらしくない。そのため、知覚経験の現象的性格について共通要素説を採用する動機があることを確認したうえで(選言説を採用する動機については第一節でも論じてある)、知覚経験の現象的性格については、選言説と共通要素説のあいだに実質的な争点があると結論する。

ある単一の知覚経験をもつことによって二種類(以上)の反省的にアクセス可能な理由が与えられるというのは可能だろうか。知覚経験をもつことによって反省的にアクセス可能な理由が与えられるという考えは、(少なくとも部分的には)日常的な正当化実践から引き出されているように見える。ある主体が冷蔵庫の中に置かれたビールについての真正な知覚経験をもち、「冷蔵庫のなかにビールがある」という判断を下してそう発話した場面を考えよう。そのように判断を下した理由を問われたとき、その主体は「冷蔵庫のなかにビールがあるのを見たから」と事実的な理由をあげて答えることもできるし、「冷蔵庫のなかにビールがあるようにみえたから」と事実的ではない理由をあげて答えることもできるだろう(そして、どちらの答えが適切かは問いの文脈によると考えられる)。ここから、冷蔵庫の中にあるビールの真正な知覚経験をもつことで、それら二種類の反省的にアクセス可能な理由のどちらも利用可能になるということが示唆される。真正な知覚経験をもつことにより事実的な理由と非事実的な理由のどちらも利用可能になるのだとすれば、前者を選言説の枠組みで後者を共通要素説の枠組みで特徴づけることができるので、反省的にアクセス可能な理由について選言説と共通要素説のあいだに実質的な係争点はないことになる。

では、単一の知覚経験が二種類以上の内容をもつというのは可能だろうか。ある知覚経験がどういう内容をもつかは、その内容にどういう理論的役割を与えるかによって変わると考えられる。たとえば、知覚経験の内容がその現象的性格を説明するという立場をとると(Chalmers 2006; Schellenberg 2010; Tye 1995)、知覚経験の現象的性格のあり方によってその内容が決まることになる。他方で、知覚経験の内容は知覚経験の正しさ条件についての直観に照らし合わせて決められるべきという考え方もある。あるいは、ある知覚経験からどういう判断を合理的に導けるかに応じてその内容が決まるという考え方もあるだろう。そして、どの立場をとるかによってある特定の知覚経験に割り当てるべき内容が変わることがある。たとえば、Schellenberg (2010)は、知覚経験が特定の個物についてのものであるという直観に従えば知覚経験の内容を関係説的に考えるべきだと論じる一方で、知覚経験の現象学を説明するという観点からすると知覚経験の内容を共通要素説的に考えるべきだと主張する。そして、Schellenberg が論じるように、知覚経験の内容に与える理論的役割が複数ある場合には、それらに対応する複数種類の内容を単一の知覚経験に付与することに問題はないと考えられる²⁵。

最後に、単一の知覚経験が二種類以上の現象的性格をもつというのが可能かどうかを検

²⁵ 知覚経験に複数種類の内容を認める立場としては、他にも Chalmers (2006)や Siegel (2010)らがいる。

討する。ある知覚経験がどういう現象的性格をもつかはどのようにして決まるのだろうか。知覚経験の内容と同様に、知覚経験の現象的性格にも理論的役割が付与されることがある。たとえば、1.4 節でも述べたように、知覚経験において X が現前することによって X についての直示的思考が可能になるという立場があり、また関連して、X が現前することによって X の本性についての知識が利用可能になるという立場もある(Logue 2012b)。これらの説明的役割は、知覚経験の現象的性格の選言説的な特徴づけを支持するとされる。他方で、知覚経験の現象的性格は真正な知覚経験と幻覚経験の内観的な区別不可能性を説明すると論じられることもあり(Farkas 2008)、この説明的役割は知覚経験の現象的性格の共通要素説的な特徴づけを支持する。

では、これらの説明的役割に応じて、単一の知覚経験が複数種類の現象的性格—片方は選言説的に特徴づけられもう片方は共通要素説的に特徴づけられる—をもつと結論付けることはできるだろうか。ここで強調すべきなのは、「知覚経験の内容」が理論的概念であり、それが果たす説明的役割によってその意味が与えられるのに対し、「知覚経験の現象的性格」はそうした理論的概念ではないという点である。「ある知覚経験をもつことがそのようなことであるような何か(what it is like to have a perceptual experience)」は、それがもつ理論的・説明的役割によって意味づけられるわけではない。まさにその経験をもつことにそうした何かがあるということによって意味づけられるのである。このことは、意識経験の現象的性格がその機能的性格と対比的に特徴づけられることにも示されている(Chalmers 1996)。というのも、もしも「意識経験の現象的性格」が理論的・説明的役割によって意味づけられるのであれば、それが機能的に分析されるということは前提として受け入れられるべき事柄であるからである(たとえどういう分析が適切かについて論争があったとしても)。結局のところ、ある知覚経験がどういう現象的性格をもつかは、その経験をもつことがどのようなことであるかによって決まるのであり、それがどういう理論的・説明的役割をもつかによって決まるわけではない。「知覚経験の現象的性格」が理論的・説明的役割によって意味づけられるわけではないならば、たとえ知覚経験の現象的性格に二種類以上の理論的・説明的役割が提案されているとしても、それぞれに対応する二種類以上の現象的性格があるということは帰結しない。

そもそも、単一の知覚経験は二種類以上の現象的性格をもちうるのだろうか。ここには二つの異なる論点がある。一つは、単一の知覚経験が数的に複数の現象的性格をもち、それらが異なる種類に属すということが可能かどうか、という論点である。もう一つは、単一の知覚経験がもつ(数的には一つの)現象的性格が複数の種類に属することが可能かどうかという論点である。結論を先取りして述べると、どちらも可能ではない。

まずは前者の論点から取り組んでいこう。知覚経験の現象的性格は「知覚経験をもつときには、具体的な対象のようにみえる何かが生じている」と述べることによって特徴づけられる。したがって、知覚経験が数的に複数の現象的性格をもち、それらが異なった種類に属すと言えるのは次の場合だと考えられる。すなわち、生じているものが実は複数

あり、それらが別の種類のものであるときである。だが、これは現象学的にもっともらしくない。たとえば、私はいま赤いリンゴを見ており、赤いリンゴのようにみえるものが現前している。このとき、実はそこに二種類の別個のものが同時に現前しているというのは現象学的にもっともらしくない。つまり、そこには一つのものだけ—それが実物のリンゴであれ私秘的な心的対象であるセンスデータ²⁶であれ心的性質としてのクオリアであれ、そのうちのどれか一つだけ—が現前しているようにみえるのであり、それらが二重三重に現前しているようにはみえないのである。

次に、単一の知覚経験がもつ（数的には一つの）現象的性格が複数の種類に属することが可能かどうかという論点に取り組んでいこう。どういう場合に数的に一つの現象的性格が複数の種類に属すると言えそうだろうか。ここには二つの可能性がある。一つは、赤いリンゴのようにみえるものが現前するということが、二種類（以上）の別の性質によって根拠づけられている(grounded)ケースである。もう一つは、赤いリンゴのようにみえるものが現前しているとき、そこに現前するものが二種類以上のものから構成されているというケースである。以下では、これら二つのケースについて論じていく。

まずは第一のケースから考えていこう。たとえば、ある知覚経験において現前しているのは実物のリンゴだが、その現前が主体とその実物のリンゴとの知覚関係とその主体が実物のリンゴに対してもつ表象作用のどちらによっても根拠づけられるということが可能なのではないか。その場合には、その経験がもつ現象的性格は知覚関係によっても表象作用によっても根拠づけられているので、関係的でもあり表象的でもある—したがって、複数の種類に属する—と言えるのではないか。この主張のポイントは、因果的多重決定の事例を念頭に置くと理解しやすい。誰かが頭を撃ちぬかれるのと同時に心臓を刺されて死んだとしよう。このとき、その人の死は頭に銃弾を受けることと心臓にナイフを刺されることのどちらによっても引き起こされていると言えるのではないか。その場合には、その人が二種類の殺され方をした—銃殺されかつ刺殺された—というのは正当なのではないか。

だが、このケースにおいてその経験の現象的性格が関係的でも表象的でもあるということの意味は、その現象的性格がどちらの種類にも属するというではない。このことを示すため、まずは上記の因果的多重決定の事例をより詳しく分析してみよう。議論のため、ここでは脳死を死の基準とする。その因果的多重決定の事例においては、(I)主に頭に銃弾を受けることからくる直接的なダメージでその個別的な脳死が引き起こされたのか、(II)主に心臓への直接的なダメージによる血流不足でその個別的な脳死が引き起こされたのか、(III)それともその両者が統合的に関与したのかを区別することができる。そして、(I)の場合にはその人は銃殺されたということになり、(II)の場合にはその人は刺殺されたということになり、(III)の場合にはその人は厳密には銃殺でも刺殺でもなくいわば銃刺殺されたというこ

²⁶ センスデータは「知覚経験の直接的対象」と特徴づけられることがあるが、その場合は日常的で具体的な対象もセンスデータでありうることになる。ここではセンスデータを心的で私秘的な対象として特徴づけているので、そうした解釈ははじめから除外されている。センスデータについては、Macpherson(2014)やFish(2010, chap. 2)を参照せよ。

とになると考えられる。このケースにおいて頭が撃たれることと心臓が刺されることのどちらもその人の死を引き起こすのに十分であったということは、その人の殺され方が刺殺と銃殺のどちらでもあったということを意味しない。たとえ銃弾とナイフが統合的にその人を死へと向かわせたとしても、その人の殺害は銃殺という種類にも刺殺という種類にも属すということにはならず、銃刺殺という特殊な種類の殺され方に属すということになるだろう。

同様の考察は、実物のリンゴの現前が知覚関係と表象作用のそれぞれによって二重に根拠づけられているとされるケースにも当てはまる。ある知覚経験において赤いリンゴが現前しているとしよう。その赤いリンゴは、(1)それと主体のあいだに知覚関係が成立することによって現れているのか、(2)赤いリンゴに対する主体の表象作用によって現れているのか、あるいは(3)そうした表象作用と知覚関係が統合的な仕方で成立していることによって現れているのかのどれかである。だが、(1)と(2)のケースでは、その知覚経験は二種類の現象的性格をもっていることにはならない。また、(3)のケースでも、その知覚経験の現象的性格が関係説的な種類と表象説的な種類のどちらにも属すということではなく、関係 - 表象的という特殊な種類に属すということになる。(そもそも、(3)のケースが本当に可能であるのか、表象作用と知覚関係が統合的にある対象の現前を成立させるとは具体的にどうということなのかは明らかでない。) 結局のところ、ある種の対象の現前が二種類の性質によって根拠づけられるというときには、どちらの性質もその種の対象を現前させるのに十分だと言うことを意味しているだけであり、その経験の現象的性格が二つの種類に属すということの意味しないのである。

次に、単一の知覚経験がもつ(数的には一つの)現象的性格が複数の種類に属すると言えそうなるもう一つのケースについて考えていこう。もし現前しているものが二種類のものから構成されるのなら、その経験の現象的性格が複数の種類に属するとは言えるのではないか。たとえば、赤いリンゴのようにみえるものが現前しているとき、そのものが赤さのセンスデータと実物のリンゴの両方によって構成されているとしよう。この場合には、その経験の現象的性格は素朴實在論的な種類とセンスデータの種類の両方に属すると言えるのではないか。こうしたケースが実際に可能であるかは不明であるが、たとえ可能だとしても、これが「単一の知覚経験がもつ現象的性格が複数の種類に属する」ことだとは思われない。というのも、上記のケースでも、その経験の現象的性格は素朴實在論的な種類とセンスデータの種類の両方に属するわけではなく、いわば「素朴實在論 - センスデータの」という一つの種類に属することになると考えられるからである。そういうわけで、単一の知覚経験がもつ(数的には一つの)現象的性格が複数の種類に属するというのはありそうもない。

結論を述べよう。単一の知覚経験が二種類(以上)の現象的性格をもつ(一見したところ)ありえそうな二つのあり方があった。だが、どちらも実際には単一の知覚経験が二種類の現象的性格をもつケースとは言えない。したがって、単一の知覚経験が二種類(以上)

の) 現象的性格をもつというのはいささかありえない。このことを踏まえると、知覚経験の現象的性格を選言説的に捉えるべきか共通要素的に考えるべきかは実質的な係争点だと言えるだろう。そして、この衝突は、知覚経験の現象的性格に与える理論的・説明的役割が選言説と共通要素説の擁護者のあいだで異なっているということを認めるだけでは解消できない。この論争においてどちらが正しいのかを明らかにするためには、知覚経験の現象的性格にどのような理論的・説明的役割を付与すべきなのかという規範的な考察が不可欠であるだろう。

謝辞

本論文のドラフトを検討し有益なコメントを下されたPOPS研究会のメンバーに感謝する。特に、小草泰氏からは本論文第三節について重要なコメントをいただいた。なお、本研究はJSPS 科研費（課題番号：15J00653）の助成を受けて行われたものである。

文献

- Beck, Ori. 2018. “Rethinking Naive Realism.” *Philosophical Studies*, 1–27.
- Brewer, Bill. 2011. *Perception and Its Objects*. Oxford University Press.
- Burge, Tyler. 2005. “Disjunctivism and Perceptual Psychology.” *Philosophical Topics* 33 (1): 1–78.
- Byrne, Alex, and Heather Logue. 2008. “Either/Or.” In *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, edited by Adrian Haddock and Fiona Macpherson, 29:314–19. Oxford University Press.
- Campbell, John. 2002. *Reference and Consciousness*. Oxford University Press.
- . 2010. “Demonstrative Reference, the Relational View of Experience, and the Proximity Principle.” In *New Essays on Singular Thought*, edited by Robin Jeshion. Oxford University Press.
- Chalmers, David J. 1996. *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*. Oxford University Press. 邦訳：『意識する心—脳と精神の根本理論を求めて』白揚社
- . 2006. “Perception and the Fall from Eden.” In *Perceptual Experience*, edited by Tamar S. Gendler and John Hawthorne, 49--125. Oxford University Press.
- Dancy, Jonathan. 2008. “On How to Act: Disjunctively.” In *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, edited by Adrian Haddock and Fiona Macpherson, 262--282. Oxford University Press.
- Dorsch, F. 2016. “Perceptual Acquaintance and the Seeming Relationality of Hallucinations.” *Journal of Consciousness Studies* 23 (7–8): 23–64.
- Dretske, Fred. 1995. *Naturalizing the Mind*. MIT Press. 邦訳：『心を自然化する』（勁草書房）
- . 2003. “Experience as Representation.” *Philosophical Issues* 13 (1): 67–82.
- Farkas, Katalin. 2008. *The Subject’s Point of View*. Oxford University Press.
- Fish, William. 2005. “Disjunctivism and Non-Disjunctivism: Making Sense of the Debate.”

- Proceedings of the Aristotelian Society* 105 (1): 119–27.
- . 2008. “Relationalism and the Problems of Consciousness.” *Teorema: International Journal of Philosophy* 28 (3): 167–80.
- . 2009. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford University Press.
- . 2010. *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*. Routledge. 邦訳：『知覚の哲学入門』（勁草書房）
- Genone, James. 2016. “Recent Work on Naive Realism.” *American Philosophical Quarterly* 53 (1).
- Grice, H. P. 1961. “The Causal Theory of Perception, Part I.” *Proceedings of the Aristotelian Society* 121: 121–52.
- Hinton, J. M. 1967. “Visual Experiences.” *Mind* 76: 217–27.
- . 1973. *Experiences: An Inquiry Into Some Ambiguities*. Oxford: Clarendon Press.
- . 1980. “Phenomenological Specimenism.” *Analysis* 40: 37–41.
- Kennedy, Matthew. 2009. “Heirs of Nothing: The Implications of Transparency.” *Philosophy and Phenomenological Research* 79 (3): 574–604.
- . 2013. “Explanation in Good and Bad Experiential Cases.” In *Hallucination: Philosophy and Psychology*, edited by Fiona Macpherson and Dimitris Platchias, 221–54. MIT Press.
- Kirchhoff, Michael. 2017. “Predictive Processing, Perceiving and Imagining: Is to Perceive to Imagine, or Something Close to It?” *Philosophical Studies*.
- Kriegel, Uriah. 2015. *The Varieties of Consciousness*. Oxford University Press.
- Logue, Heather. 2011. “The Skeptic and the Naïve Realist.” *Philosophical Issues* 21 (1): 268–88.
- . 2012a. “What Should the Naïve Realist Say about Total Hallucinations?” *Philosophical Perspectives* 26 (1): 173–99.
- . 2012b. “Why Naive Realism?” *Proceedings of the Aristotelian Society* 112 (2pt2): 211–37.
- Macpherson, Fiona. 2014. “Is the Sense - Data Theory a Representationalist Theory?” *Ratio* 27 (4): 369–92.
- 前田高弘. 2002. 「視覚の因果説」. 『科学基礎論研究』 98: 103-109.
- Martin, Michael G. F. 2004. “The Limits of Self-Awareness.” *Philosophical Studies* 120 (1–3): 37–89.
- . 2006. “On Being Alienated.” In *Perceptual Experience*, edited by Tamar S. Gendler and John Hawthorne, 354–410. Oxford University Press.
- McDowell, John. 2008. “The Disjunctive Conception of Experience as Material for a Transcendental Argument.” In *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, edited by Fiona Macpherson and Adrian Haddock, 376–389. Oxford University Press.
- Nanay, Bence. 2014. “The Representationalism versus Relationalism Debate: Explanatory Contextualism about Perception.” *European Journal of Philosophy* 23 (1): 321–36.
- Niikawa, Takuya. 2014. “Naive Realism and the Explanatory Gap.” *An Anthology of Philosophical*

Studies 8: 125–37.

———. 2016. “Naïve Realism and the Explanatory Role of Visual Phenomenology [Special Issue].” *Argumenta - Journal of Analytic Philosophy* 1 (2): 219–31.

新川拓哉. 2012. 「認識論的選言説と懐疑論」. 『哲学』（北海道大学哲学会）48: 201-227、

小草泰. 2010. 「知覚経験の志向説と選言説」. 『科学哲学』42-1: 29-49.

Orlandi, Nicoletta. 2013. “Embedded Seeing: Vision in the Natural World.” *Noûs* 47 (4): 727–47.

Pautz, Adam. 2010. “Why Explain Visual Experience in Terms of Content?” In *Perceiving the World*, edited by Bence Nanay, 254--309. Oxford University Press.

Pritchard, Duncan. 2012. *Epistemological Disjunctivism*. Oxford University Press.

Raleigh, Thomas. 2011. “Visual Experience & Demonstrative Thought.” *Disputatio* 4 (30): 69–91.

Schellenberg, Susanna. 2010. “The Particularity and Phenomenology of Perceptual Experience.” *Philosophical Studies* 149 (1): 19–48.

Searle, John R. 1983. *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*. Cambridge University Press. 邦訳：『志向性一心の哲学』誠信書房

Siegel, Susanna. 2010. *The Contents of Visual Experience*. Oxford University Press.

Smithies, Declan. 2013. “Review of Duncan Pritchard, *Epistemological Disjunctivism*.” *Notre Dame Philosophical Reviews*.

Snowdon, Paul. 2005. “The Formulation of Disjunctivism: A Response to Fish.” *Proceedings of the Aristotelian Society* 105 (1): 129–41.

———. 2008. “Hinton and the Origins of Disjunctivism.” In *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, edited by Adrian Haddock and Fiona Macpherson, 35--56. Oxford University Press.

Soteriou, Matthew. 2000. “The Particularity of Visual Perception.” *European Journal of Philosophy* 8 (2): 173–89.

———. 2013. *The Mind's Construction: The Ontology of Mind and Mental Action*. Oxford University Press.

———. 2016. *Disjunctivism*. Routledge.

Sturgeon, Scott. 2008. “Disjunctivism about Visual Experience.” In *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, edited by Adrian Haddock and Fiona Macpherson, 112--143. Oxford University Press.

Thau, Michael. 2004. “What Is Disjunctivism?” *Philosophical Studies* 120 (1–3): 193–253.

Travis, Charles. 2004. “The Silence of the Senses.” *Mind* 113 (449): 57–94.

———. 2005. “Frege, Father of Disjunctivism.” *Philosophical Topics* 33 (1): 307–34.

Tye, Michael. 1995. *Ten Problems of Consciousness: A Representational Theory of the Phenomenal Mind*. Mit Press.

———. 2009a. *Consciousness Revisited: Materialism Without Phenomenal Concepts*. Mit Press.

———. 2009b. “The Admissible Contents of Visual Experience.” *Philosophical Quarterly* 59 (236):

541–62.

Wright, Crispin. 2008. “Comment on John McDowell’s ‘The Disjunctive Conception of Experience as Material for a Transcendental Argument.’” In *Disjunctivism: Perception, Action and Knowledge*, edited by Adrian Haddock and Fiona Macpherson. Oxford University Press.

(こいかわ たくや／日本学術振興会特別研究員 (千葉大学、PD))